

友よ 第七回

赤神 諒



第七章 中富川哀傷歌

——天正十年（一五八二年）八月、阿波国・中富川



一

川沿いの陣地には、二種の旌旗せいきが翻っている。いずれも十河存保そごうながやすが背負うへ三階菱さんがいびしに釘抜くぎぬきの三好家とへ公饗くぎょうに檜扇ひおうぎの十河家の旗印だ。
紫威むらさきの具足くそくに身を固めた存保は、築地の上に立ち、煌めく川面を見つめた。

中富川（現在の旧吉野川下流）北岸に出現した築地は、実に一里近くにわたって続く。

友よ 第7回

「これが、長宗我部を打ち破る秘策か」

存保の隣で大きく頷いた小太りの老将は赤沢宗伝である。あかさわそうでん

顔を見ればまず目に入る太い眉毛も、ここ数年で真っ白になった。亡父の代から仕える重臣で、三好家の知恵袋だ。弓上手でもある。存保の傅役を務め、幼少からわが子のごとく可愛がってくれた。太公望たいこうぼうの宗伝は、存保に釣りの楽しみを教えてくれもした。

「早々に敵を打ち払うて、釣り糸を垂らしたいものでござる」

何年も前から宗伝は隠居したがっていたが、三好家の危機が続き、後を任せるつもりだった弟子たちも先に戦死してしまい、ずるずるとその機を逃し続けて、今に至る。

「今年も結局、松鯛の顔を拝めなんだな」

長宗我部の侵攻までは、二人並んで日がな釣りをする日もあった。吉野川河口近くに棲む幻のへ松鯛まつだいは、大きな尾鰭おひれが三つもあり、松笠に似た鱗を持つ大きな魚で、三尺にもなるという。

「この夏こそは釣れると、思うとったんですがな」

西から滔々と流れてくる中富川は、ここ板野の地で南北に大きく分かれる。南から襲来する敵は、そのうち南流を渡って押し出してくるはずだが、板野に本陣を置けば、たとえ上流側へ回り込まれても、北流と南流の二つを堀として使えるわけだ。すでに橋はすべて落としてあった。

さらに存保は宗伝の献策を容れ、南流の此岸しがんに長大な築地を作ら

友よ 第7回

せた。その上で、今回の決戦のために一宮城いちのみやじょうと夷山城えびすやまじょうを捨て、五千余の軍勢をこの地に集結させたのである。

「敵は万を超える大軍だ。本当に勝てると思うか、宗伝？」

迎撃の準備は万端整えてあった。中富川沿いに延々と続く築地の真の意味は、味方の将兵にもまだ伝えていない。敵も、すぐにはわからぬはずだ。

宗伝は自信たっぷりに頷いた。

「敵の誰ぞが、わが必勝の策を早々に見抜かぬかぎり、中富川がわれらに味方し、勝利を与えてくれましょう」

三好家中の内紛と長宗我部の侵攻にもかかわらず、阿讃の三好家が所領をかるうじて維持できたのは、ひとえに宗伝の智謀による。

かつては畿内の過半を制もた三好家も、存保が元服した十五年前にはすっかり零落していた。

讃岐国の名門十河家を継いだ存保は、国内の土豪をまとめ、阿波を治める兄三好長治ながはるを支えて畿内へ兵を出し、あるいは主家に背く家臣を征伐するなど戦に明け暮れてきた。五年前に兄が戦死すると、三好家中から擁立されて当主となり、全力で勢力挽回に努めたものの、もはや衰勢は覆いがたかった。

もともと三好家は信長に長らく抵抗してきたが、長宗我部の猛攻を受け、大きく方針を変えた。存保は一族の三好笑岩しょうがんと共に、秀吉を通じて、敵であった信長に服従し、その威を以て阿讃を守ろうとした

友よ 第7回

のである。

讃岐国を存保に、阿波国を笑岩に与えるとの約を得、織田軍の支援を受けて、反攻に転じたものの、信長の急死により形勢は再び逆転した。かねて誼みを通じてきた秀吉に援軍を求めたが、秀吉は柴田勝家との対決のために、四国まで兵を回す余裕がなかった。

「殿、一大事でござる！」

築地を駆けてくる獅子の如き巨漢は、三好勢きつての猛将、七条兼仲である。硬骨漢の忠臣は、刃身が四尺（約一・二メートル）超の大薙刀を操る万夫不当の英傑だが、そのぶん頭のめぐりは今ひとつだった。

存保は宗伝、兼仲と共に過酷な乱世を駆け抜けてきた。

「あの豪傑があれほど慌てるとは、間違っって松鯛でも釣り上げたのではないか」

存保がおどけると、宗伝が愉快そうに笑った。兼仲も同じく釣りをやるが、存保や宗伝と違い、下手の横好きだ。

だが、息を切らせた兼仲の途切れとぎれの報告に、存保は息を呑んだ。

放っていた謀者によれば、敵は二万数千にも及ぶという。三好勢の五倍近い。これほどの大軍とは考えていなかった。

「元親は十五歳から六十歳までの全男子に、出陣を命じたとか」
大兵力を投入して、一気に決着を付ける肚だ。

友よ 第7回

宗伝は長い白眉毛を中富川の対岸に向けているが、黙したまま表情は変わらない。

荒い息もまだ収まらぬうち、兼仲が進言してきた。

「野戦では勝ち目がござるまい。かくなる上は勝瑞城まで退いて、籠城すべし」

だが、五千の兵で籠城戦に入ったところで、兵糧はひと月分しかない。仮に秀吉が畿内で勝利しても、援軍が間に合うとは思えなかった。存保は生き延びるための方途を思い巡らせた。

かつて伯父の三好長慶は、ながよしへ鬼十河とと勇名高い実弟の十河一存かずながと共に天下に覇を唱えた。三好家の当主となった今も、存保は叔父で育て親の一存を誇りとし、ふだんはむしろ「十河」の姓をよく用いた。存保には三好家、十河家両当主としての誇りがある。土佐の一土豪に過ぎぬ長宗我部なぞに膝を屈するわけにはいかぬのだ。

中富川の流れを見ながら考え込んでいた宗伝が、ぼそりと問うた。「兼仲よ。それほどの大軍なら、敵は二手に分かれて参ろうな？」
「いかにも」

物見によれば、元親・信親の率いる本軍が中富川南流の西、すなわち上流側から、香宗我部親泰の率いる別働隊が東、下流側から、それぞれ攻め寄せてくる。

宗伝は声を立てて笑い出した。

「何たる幸運か。本軍を上流へ誘い込む必要がなくなりましたぞ。大

友よ 第7回

軍ゆえに、かえって味方が邪魔になる。わが策に気付いたとて、すぐには動けまい。われらにとっては、またとない好機じゃ。元親めを討ち取りましようぞ」

兼仲は呆氣にとられた顔つきで、宗伝を見ている。が、存保にはわかった。

「川がわれらに味方すると申すのじゃな、宗伝？」

「御意。陸おかと違ちがうて、川は動きますからの」

白眉毛がにこやかな笑みを浮かべると、ただの釣り好きの好こう々こう爺やにしか見えない。

「待たれい、軍師殿。いかにこの長い築地で守ろうとも、敵の大軍は防ぎ切れませんぞ」

まだ宗伝の策を知らぬ兼仲は、慌てふためいている。

「それで良いのじゃ。あの築地は守るために作りし物ではないゆえのう」

存保は猛将の逞しい肩に手を置いた。

「兼仲よ。これよりお前にも宗伝の秘策を明かす。狙うは元親の首よ」

「畏れながら、慎重居士しんちようこじの元親は、ずっと本陣で腰を据えたまま、動きまますまい」

宗伝が片笑みを浮かべて兼仲に応じた。

「じゃからこそ、勝てるのよ。仮に元親を討てぬ時は、ご自慢の御曹司、信親を生け捕る。人質となせば、元親は手も足も出せぬからな」

友よ 第7回

宗伝は懐から中富川付近の絵地図を取り出して、開いた。



二

中富川南流の南岸に敷かれた本陣の帷幄から出ると、羽床資吉の巨体が信親を待ち受けていた。

「若、いよいよご出馬にございまするな？」

元親は初陣の藤目城攻め以来、戦の趨勢が定まるまで、信親の出撃を認めなかった。

「うむ。意外に早くお許しが出た。参るぞ」

信親は白銀に紅系威ベにいとわむしの二枚胴の具足姿である。亡き友、波川弥次郎と共に四国統一戦を戦いたいと考え、穴喰屋しくいに頼み、白銀を紅色の糸で威し直してもらった。

この日、長宗我部軍は必勝を期し、総勢二万三千の大兵力で、怒涛の如く阿波へ侵攻した。

三好軍は北岸に営々と築地を築いて待ち受けていたが、昼下がりに、東の下流側を担当する香宗我部親泰の別働隊が先に仕掛けた。

最初こそ、城壁のように巡らされた築地から熾烈しれつな弓鉄砲攻撃を見舞われて苦戦していたが、別働隊だけでも数は三好方に勝っている。ほどなく築地に到達し、乗り越えて斬り結んだ。次々と築地を突破して敵陣へ攻め込み、さらには本軍からも、福留隼人を先頭に主力部隊が押し出した。築地の向こうでは敵を圧倒し、長宗我部が断然優

友よ 第7回

勢だとの報せが届いていた。いかに三好勢が奮戦しようとも、兵力が
違いすぎた。

早々と勝ちが見えたため、むしろ敵が撤退してしまう前にと、本陣
脇に控える信親隊の出撃となったわけである。

「せっかく大手柄を立てようと思うたに、早うせねば、間に合いませ
んぞ」

資吉がブンと風を殴って、長大な金碎棒を振り回している。

二人は約五百名の自隊に戻り、眼前に広がる大河を見やった。

土佐の瓶ヶ森かめがもりに源を発する吉野川は、阿波国を西から東へ大きく
横切ってこの下流まで来ると、「中富川」と呼ばれている。

晴れが続いても水量に衰えはない。四国一とされる雄渾ゆうこんな流れだ。

中富川を渡る風はすでに秋の翳かげりを帯びていたが、遠く対岸の死
闘で流されている血の匂いは混じっていなかった。

「さてと、彦十郎。俺たちはどこから戦に加わる？」

「築地のせいで、ここからは戦の様子が見えませぬ。されば——」

彦十郎を遮るように、資吉が体のあちこちの骨をボキボキ鳴らし
始めた。

「どこでもよいから、早う渡りましようぞ。遠くまで攻め込んでしも
うて、味方の姿も見えんほどじゃ。すでにお味方大勝利にて、拙者は
兜首ひとつ取れんやも知れん」

「この様子ではもう、十河存保の首級しるしを三らいいしか、残っとらんのを」

友よ 第7回

三蔵も愚痴をこぼす隣で、彦十郎は目をすがめて対岸を見やっている。

「彦十郎。対岸からの報せでは、敵の本陣は中央であったな」

三好方の旗指物はたさしものは中央に集まっているように見えるが、高い築地のために定かでない。味方が一方的に押し込んでおり、敵勢はすべて築地の向こうにいた。

「これでは、敵が本陣を移してもわかりませぬな。気懸りは、三好方にいる老獪な知将、赤沢宗伝。下流は混み合っておりますゆえ、われらは一番上流へ回り込んで、まずは戦況を掴みましょう」

川を挟み、川の中で戦をすれば、大河の流れによって、どうしても戦場は下流へ移動してゆく。下流側の彼岸では混戦が続く一方、上流側の戦場は人影もまばらだった。

「待たれい、彦十郎殿。話が逆じゃ。なぜわざわざ敵がおらん所へ向かうのでござる？」

戦功が遠のいてしまうと、資吉が泣き出さんばかりに訴えた。

三好軍は、「く」の字の形に南北二つに分かれる中富川の股近くに布陣している。長宗我部軍はいわば右足に相当するへ南流へから攻めているわけだが、彦十郎は股の上の腹を通して、左足に相当するへ北流へ回り込むという。

「北流側まで築地を作ってはおるまい。敵陣の配置を確かめるのだ」
「資吉、上流のほうが味方も少なからうゆえ、手柄をあげやすいやも

友よ 第7回

知れぬぞ」

信親が励ますように大きな肩を叩くと、資吉が気を取り直した様子で金砕棒かなさいぼうを振り上げた。

「なるほど。左様でござるな」

信親は馬に跨り、己に従う兵たちを顧かえりみた。

「皆の衆、参るぞ！」

馬上で下知すると、信親隊が勇ましい鯨波けいはを空へ上げた。三蔵も張り切っている。もともと家臣団は自慢の子弟を信親のもとへ送り込んでおり、平時も鍛錬を重ねてきたから、今では信親隊も、福留隊に次ぐ精鋭と言ってよい。

信親は隊の先頭に立ち、中富川へ馬の脚を踏み入れる。勢いよく水しぶきが上がった。

上流側へ大きく迂回してゆく。

「流されておるぞ。川に逆らって進め！」

資吉が叱咤している。中富川の流れは強く速く、気を払わねば足を取られかねないほどだ。大河は陸路と違い、行軍に数倍の時を要するが、信親隊は一系乱れず、整然と進む。

「敵将の十河存保は、なかなか天晴れな将ではないか」

築地の向こうで、まだ決着が付かぬのは、敵が退かずに踏みとどまっているからだ。長宗我部軍の四分の一にも満たぬ兵で、武家の誇りのために、敗北を覚悟で決戦に挑んでいる。信親が存保なら、同じ戦

友よ 第7回

いをしたはずだ。このような男を、信親は嫌いではない。

渡河を開始し、北流側へ回り込むうち、次第に築地の向こうの様子が見えてきた。

右隣では彦十郎が無言で河中に駒を進めながら、築地の裏側を眺めている。

「おや、意外に敵が大勢おりますな」

左隣の資吉が喜色を浮かべている。

いや、思っていたよりはるかに多い。

二千は下るまい。それに何なのだ、この陣形は……。

対岸の三好勢は当初、築地沿いに横長の陣を敷いていたはずだ。普通なら、そのまま居城へ後退するか、乱戦になるはずだった。だが最上流の敵陣は今、瘤こぶのように膨れ上がっている。

信親は手を上げて、兵を止めた。

馬上の彦十郎が眉根を寄せ、珍しく焦りを見せた。

「謀ちれましたぞ。あの長大な築地は守りでなく、三好勢の動きを隠すために作りしものでござる」

ゾッと、背筋に悪寒が走った。

敵は延々と続く築地で応戦し、渡河する長宗我部兵を鉄砲で苦しめた。だがしよせん、築地での防戦はしばしの時間稼ぎにすぎない。兵力差により突破されるが、敵もそれは織り込み済みだ。

中富川の強い流れのために、戦場は必ず下流側へ移動する。三好軍

友よ 第7回

は下流側から一方的に押し込まれていると見せかけ、必ず手薄となる最上流部へ兵を集結させていたのだ。軍勢が崩れず、統率が取れているのが、その証だ。築地の向こう側の味方は、敵が戦いながら撤退するため、自軍が圧倒して**三**いると思ひ込まされていた。

敵將兵が集結している場所は長宗我部軍本陣の対岸、上流寄り。

狙いは明らかだ。

「鋒矢の陣形。敵は、御館様のお命を狙っており申す！」

傍らの彦十郎が馬上で叫んだ時、ひと塊になった三好勢が突然、前へと動き出した。

今、戦場の最上流部に、長宗我部勢はほとんどいない。

敵は軽々と築地を越え、一斉に南流を渡河し始めた。

手薄になった最上流部からほぼ全軍で川を渡り、一挙に本陣を衝き、元親を討つ作戦だ。

「何とする、彦十郎?!」

築地内側の長宗我部軍は、三好軍の動きにようやく気付き、その後を襲おうとしている。

だが、次々と築地を乗り越えた敵勢の半分ほどは、そのまま踏みとどまった。驚くべきことに、今度は逆**三**築地を川側から守りに用い、鉄砲を撃ち始めたのである。築地内側の味方が足止めを喰らっていた。このままでは、一挙に本陣へ突入されかねない。

「まだ手はござる。されど、隊を半分に割れば……」

友よ 第7回

彦十郎は途中で口をつぐんだ。信親隊五百での戦は危ないと考えたのだろう。

「俺は先頭の敵を横から攻めて、できるだけ足止めをする。されば彦十郎は、岸边近くへ回って迎え撃て。決して敵を本陣へ突入させるな。お主の策も同じであろうが」

彦十郎は苦い顔のまま、頷いた。

「致し方なし。されど今この川では、敵が断然有利。無茶はなさるな」
「資吉は彦十郎と共に行って、大手柄を立てよ。皆、参るぞ！」

信親は北流へ向かっていた進路を、真南に変えた。



三

「勝ちは見えたぞ！」

十河存保は大身槍を手に雄叫びをあげ、中富川へ馬を入れた。

水しぶきが豪快に上がる。

嘘のように軍勢は進む。敵がないからだ。

行く手から敵を追い払い、勝機を作り出してくれたのは、中富川の
大いなる流れだった。

築地のために、対岸からは三好本陣の位置を見定められぬ。存保は
ひたすら我慢を重ね、最上流部へ兵を集結させた。築地を越えた長宗
我部勢は、懸命に防戦しながら上流へと後退する三好勢を見て、逃げ
場もなく追い詰められていると誤信していたはずだ。

友よ 第7回

だが抗戦と後退は、防御のためではない。最上流で突撃用の攻撃陣
〈鋒矢〉を作るためだった。

鋒矢の尖った先、敵の本陣は手薄だ。

このまま突撃に成功すれば、巨大な矢の尖端を敵本陣に突き刺せる。下流側の敵は多いが、すぐには大河を遡さかのぼって守れない。背後と左手の下流から兵を削られてもかまわぬ。矢印の形をした陣形三川に軍勢の橋をかけ、その尖端さえ敵本陣に到達したなら、元親を討ち取れよう。勝利だ。

「殿、右手より小勢が参りますぞ」

後ろの兼仲の声で目をやると、白銀に紅糸威べにいとわどしの具足を身に着けた長身の武者が、まっしぐらに馬を駆ってくる。三好軍よりもさらに上流とは、意外で邪魔な場所にいるが、幸い寡兵だった。

「そこにあられるは、三好家の総大将とお見受け致す！」

やや高めの澄んだ声が、戦場で朗々と響いた。

「先を急ぎますぞ、殿」

左隣の宗伝に頷き、存保は馬首を下流側へ向けた。

若武者に構わず馬を進める。

が、若き将は瞬く間に川を下り、右前方に現れた。見事な馬術だ。川の流れを素早く見極めている。

「われこそは、長宗我部宮内少輔くわいしやうゆわうが一子、信親なり！」

何と、この若者が御曹司か。あえて名乗りを上げたのは、あたう限

友よ 第7回

り多くの兵を惹きつけて、本陣への突撃を弱めるためだろう。

「いざ尋常に勝負されよ！」

信親が勢いよく片鎌槍を突き出してきた。速い。

かろうじて、槍で払う。

歴戦の存保も、武芸には自信がある。だが、信親の伎倆ぎりょうは相当だと聞いていた。

「いかにもわしが十河存保なれど、其許こゝろに付き合あうておる暇はない。

——兼仲！」

雄叫びと共に大薙刀が割って入った。七条兼仲である。

「御曹司の相手を頼んだぞ。わしは元親を討つ」

馬首をまっすぐ下流へ向けた。流れに乗る。

「わしが相手じゃ、若造！」

存保の背後で、甲高い剣戟けんげきの音が聞こえ始めた。

馬首を対岸へ向け直して、進む。もうすぐ川の半ばだ。

謀られたと気付いた長宗我部軍が遠く下流から遡上そじょうしてくる。

が、もう手遅れだ。

「一挙に攻め込め！」 脇目も振らずに馬を進めた。

宗伝の策は的中した。

元親の本陣が見える。長宗我部は勝利を確信し、ほとんどの敵将は手柄欲しさに築地の向こうにあり、本陣には今、わずかの兵と近習たちがいるのみだ。川から陸へ三好軍を上げまいと、慌てて川岸に兵を

友よ 第7回

展開させているが、手薄だった。

「われらが勝ったぞ！ 進め！」

存保が叫んだ時、上流から流れに乗って小隊が現れた。

元親の本陣すぐ前の水際に、整然と並び始める。

——ちっ、鉄砲隊か。

白鉢巻の将が采配を振ると、浅瀬で片膝を突いた敵兵が一斉に銃口を構えた。

「構わん！ 突撃せよ！」

銃声の轟きと共に、存保の前にいた馬上の将が次々と落馬してゆく。何と正確な射撃か。

本陣の横に小男の指揮する弓兵隊が現れた。これまた規律正しい動きだ。

たちまち、弦音と共に矢が放たれた。

とっさに馬上で身を屈める。周りの将兵たちから悲鳴が上がった。

「待っておったぞ。その首、貰い受ける！」

鉄砲隊の脇から騎馬が躍り出てきた。若い巨漢が金砕棒を振り回しながら、存保の行く手を塞ぐ。

この将さえ討てば、鉄砲隊に突撃できる。

存保は自慢の大身槍を繰り出した。が、槍先を嫌と言うほど叩きつけられた。素早く槍を回転させて石突で突く。が、あっさり金砕棒で払われた。強い。

友よ 第7回

「拙者は羽床伊豆守いずのかみが一子、資吉。御曹司にお仕えしておる」
勇猛で鳴る羽床父子はかつて三好方だった。今は長宗我部に降り、
敵となって攻めてきたわけか。

鉄砲隊が次の射撃に移ろうとしていた。弾込めが速い。

「殿、無理じゃな。ここは狙いを御曹司に変えましょうぞ」

無念だが、ほどなく下流からも敵兵が寄せてくる。信親さえ生け捕りにできれば、長宗我部との交渉が成り立つ。寡兵で三好勢のただ中にいる信親は今、完全に袋の鼠だ。

宗伝に促され、存保は馬首を返した。

「待たんか！」叫びながら、金碎棒の将が迫る。

が、弦音と共に、資吉は鈍い悲鳴をあげた。宗伝の放った矢が腹に命中したのだ。

若い巨漢がどうと川の中へ落馬すると、巨大な水柱が立った。



四

「いかがした？ 片鎌を失うてからは、技に切れがないのう」

信親の前で、巨漢が天を仰いで笑った。

七条兼仲と名乗る猛将は「阿波最強の武人」と自ら豪語する通り、
恐るべき大雑刀の使い手だった。

自慢の長い赤柄あかへの大雑刀は、刃身が四尺を超えている。一騎当千と
はまさにこの男だった。数十合も打ち合わせた後、兼仲の渾身の一撃

友よ 第7回

を受け止めた時、あまりの剛力で片鎌が折り砕かれた。その後は一方的に突き込まれ、信親はあちこちに手傷を負っていた。

最上流の戦場で、数に劣る信親隊は苦戦していた。敵味方の足軽は二人の壮絶な死闘に巻き込まれぬよう、遠巻きに見ているだけだ。

「見れば、わが本陣への突入は失敗したようだ。三好の負けは定まった。降ってくれぬか」

「笑止！」 兼仲はぶ、ぶんと大薙刀で風を斬って、応じた。

「御曹司さえ生け捕れば、元親は何でも言うことを聞くそうだな」

この怪物に力では勝てぬ。ならば――

数合打ち合いながら、信親は馬をさらに上流側へ遡らせてゆく。

二人が離れた時、片鎌槍を縦に持つと、そのまま川の中へ突き刺した。

丸腰で両手を広げる。

「かかって参れ」

兼仲は呆気にとられた様子だった。

が、やがて大薙刀を手に、血相を変えて怒鳴った。

「わしを侮っておるか」

兼仲が猛然と馬を進めた。

が、下流から遡上するには時を要する。

他方、信親はすかさず馬を川の流れに乗せた。

あっという間に間合いを詰める。

兼仲が突き出しそびれた大薙刀の赤柄を握り込む。

友よ 第7回

そのまま、柄に体重を預けてのけぞり、水中へ薙刀ごと落馬した。川の中ですかさず身を起こすと、兼仲の巨体も川へ落ち、水柱が上がるどころだった。

信親ほど川慣れした人間も少ない。

突き刺していた片鎌槍を構え直す。

兼仲が水面から顔を出す瞬間を狙い、顔面を石突いしつぎで突いた。

本陣への突入を阻止した以上、長宗我部の勝ちだ。

この恐るべき豪傑を配下に加えられぬものか。

驚くべきことに、兼仲は鼻血を噴き出しながら石突を顔面で受け

止め、両手で握り込んできた。

信親は槍を手離すと、手甲で兼仲の頬を力の限り殴った。

それでも微動だにせぬ兼仲が槍を離し、太い両手を伸ばしてきた。

あえて仰向けに倒れ、川の中へ逃れた。

重い甲冑のおかげで、すぐに体を沈められる。

流れに乗って進みながら、巨体の後ろへ回り込む。川底からひと抱

えの岩を拾い上げる。

水面へ出ると、信親の姿を見失っている兼仲の背に向かい、岩を振

り下ろした。

さしもの兼仲も呻いて、河中に膝を突いた。

「兼仲、大事ないか！」

信親は背後に強い殺気を感じた。

友よ 第7回

振り向きざま太刀を抜き放ち、槍先を払う。

大身槍を繰り出してきたのは、紫威の具足をまとい、目深まぶかに被った兜の下、両の鬢びんを逆立てた精悍な顔立ちの将だった。

敵の総大将、十河存保だ。

「十河殿、見事な策であったが、すでに勝負は見えた。降ってくれぬか。お主と将兵の命は俺が請け合おう」

「長宗我部の御曹司を捕えよ！ 人質にして城へ戻るぞ！」

存保が大身槍を繰り出してくる。槍先を再び払った瞬間、ざばりと背後に水柱の立つ音がした。

たちまち、兼仲の太い腕で羽交い締めにされた。

「阿呆めが。殺せばよいものを、このわしを生け捕りにしようなぞ、百年早いわ！」

三 凄まじい怪力だ。上半身は全く身動きが取れぬ。

「でかしたぞ、兼仲」

存保が穂先で手甲を強打してきた。太刀を取り落とす。

「殿、このまま勝瑞城へ引き上げまするぞ」

白眉毛に白髯の馬上の将が三好勢に次々と指図を与えている。この老将が赤沢宗伝か。

周りに敵の足軽が群がってきた。

右足を掴もうとする一人の顔を蹴り上げる。

その瞬間、左足に組みつかれた。右足もだ。

友よ 第7回

体が水面から宙に浮いた。岸边へ運ばれてゆく。

「長宗我部の御曹司は、わが手にあり！ われらの勝利ぞ！」

勝鬨かちどきを上げるように、存保が叫んだ。

不甲斐ない。このままでは自分のせいで、阿波攻略が水泡すいほうに帰きすではないか。

齒噛みしたとき、足元のほうから剣戟の音が聞こえた。

「待たんか、下郎ども！」

資吉の声だ。あちこちで水音がし、鯨波が近づいてくる。味方か。

人質にする気なら信親を殺せまいと踏んで、逆に斬り込んできたらしい。

「若！ 今、お助けしますぞ！」

すぐそばで次々と悲鳴が上がった。

「矢疵やさずを受けておるくせに、やりおるわ。わしが始末する。こやつを頼むぞ。決して逃すな」

兼仲が右、左と一人ずつ、足輕に信親の腕を渡した。

「誰ぞ、この七条兼仲に槍を貸さんか！ わしが殿しんがりを務める！」

たちまち激しい剣戟の音が聞こえてくる。

運ばれてゆく動きが速くなった。浅瀬に近づいたのだろう。

「皆で、勝瑞城へ生きて帰るぞ！」

存保の声に、白眉毛が応じている。

「北流沿いに進め！ 後詰ごづと合流せよ！」

友よ 第7回

信親は力を溜めていた右手を突然、肘で折り畳んだ。慌てる足軽の顔に向かって拳を振り戻す。鈍い悲鳴と共に解き放たれた右手を、体を捻って左肩のほうへ突き出した。左腕を掴んでいた足軽の鼻を殴りつける。両手が解放され、背からそのまま川へ落ちた。

「何じゃ！ どうした？」

両足はそれぞれ、まだ掴まれたままだ。

川底で、左右の手に拳大の石を掴む。

腹筋で宙へ勢いよく撥ね起きるなり、右、左と石を投げつけた。

足が自由になる。

いったん川へ潜ってから、立ち上がった。

すぐそばまで駆けつけてきた足軽の長槍の柄をひっ掴むと、握り込んだ。カズくで奪い取り、構える。

「しくじったか！ 傷つけて、生け捕れ！」

存保の命で、半円状になった足軽たちが信親に槍を突き出していいる。

「やめよ！ お主らの負けだ、降ってくれ！ 命を捨てるな！」

信親は吼えながら、目の前の足軽を石突で突き飛ばした。

たじろぐ足軽たちの包囲陣を破り、長宗我部の本陣へ向かう。

中富川の真ん中で踏みとどまる兼仲が、資吉の猪首を両手で絞め上げていた。資吉は腹に矢疵を負い、本来の力が出せぬ様子だ。



——このままでは、資吉が殺される。

友よ 第7回

信親は眼前の敵足輕を槍で叩き伏せた。川の中を走る。

兼仲の向こうに白鉢巻の将が現れた。前へ出た鉄砲隊の銃口は、すべて兼仲に向けられている。

「待て、彦十郎！」

「もうよい、兼仲！ 戻って参れ！」

存保の叫び声が聞こえた時、一斉射撃の轟音が川中に響いた。

兼仲が動きを止めた。解放された資吉が水中に沈む。

轟音が生んだ静寂の中で、兼仲が大河の中に立ち尽くしていた。

信親の背後で、存保が兼仲の名を必死で叫んでいる。

何度も、聞こえた。

振り返ると、再び川へ馬を乗り入れようとする主君を、白眉毛が必

死で止めていた。

天を衝く巨体が仰向けに中富川の中へ倒れてゆくと、最後の大きな水柱が上がった。



五

「それにしても、降りますなあ」

秋の長雨に、資吉もすっかり閉口した様子で、大きな体も少ししぼんで見えるくらいだった。

信親隊は、元親が本陣を敷いた神社近くの一群の民家に分かれ、雨露を凌いでいた。得物を置き、兜を脱いで、少しばかり寛いでいる。

友よ 第7回

昼間なのに、夕暮れのように暗い。

中富川で勝利を収めた長宗我部軍は、居城へ撤退した存保の軍勢を遠巻きに包囲していた。阿波における敵の主城（勝瑞城）は、南北二つに分流した中富川の中洲にある。二百数十年の長きにわたり、阿讃と淡路を治めてきた由緒ある政庁であった。

捕えた敵兵によれば、勝瑞城内の兵糧はせいぜいひと月分だという。元親は合議の上、兵糧攻めにする^と決めた。すでに勝敗は見えており、包囲を始めて七日ほどが経つが、一昨日から延々と降り続く雨に、皆が閉口していた。一刻ほど前から、ずいぶん雨足も強くなっている。

「雨の少ない讃岐の人間には、羨ましいくらいの長雨じゃ」
確かめるように、資吉がもう一度繰り返すと、たしなめるような低音がぼそりと聞こえてきた。

「聞こえておる」
彦十郎はこんな時も油火の光で書物を読んでいた。尋ねてみると、今回は『先代旧事本紀』全十巻を読み直すそうだ。陣中でも独り、神仙の領域に遊んでいる。

「それにしても、存保は情けない姿を晒しておりましたな」
三蔵が口々に言い合い、存保の真似をして嗤^{わら}っている。

あのととき存保は、必死に兼仲の名を叫んでいた。惨めなほど取り乱す姿が、信親の脛^{またた}の裏にも焼き付いている。

友よ 第7回

「俺はそうは思わぬ。お前たちが目の前で討たれたなら、俺も同じ真似をしただろう」

三蔵はハッと気付いたような顔を見ると、呟くように「すみませぬ」と応じた。

中富川の決戦で、彦十郎の鉄砲隊が兼仲を射殺しなければ、資吉は討たれていた。彦十郎も友を守ろうとしたのだ。だが、敵にも友がいる。存保だけではない。三好の将兵一人ひとりに友がいるはずだ。乱世を生きるためとはいえ、なぜ人は、人から友を奪わねばならぬのか。しばしの沈黙の間、聞こえるのは猛烈な雨音だけだった。ますます激しくなっている。

彦十郎が書物から顔を上げて、ぼそりと呟いた。

「若が仰せのごとく、一刻も早う乱世を終わらせるべし」

それが、本来なら読書三昧の日々を送りたいはずの彦十郎が、信親に従い、**戦場**に身を置く理由だろう。

信親はさっと立ち上がり、戸口へ向かった。

「兵たちは皆、雨宿りできているであろうか。ちと俺は、外の様子を見て参る」

実はもう一つ、確かめたいことがあった。時どき誰かの視線を感じるのだ。入江左門のような冷たさはなかった。もしや忠兵衛あたりが密かに付けた、新たな忍びか。

「おお、拙者も参りますぞ。若、待ってください」

友よ 第7回

「わしらもお供仕りまする」と三蔵が言い始めた時――

外で突然、ど、どん、と大きな鈍い音がした。

大地の揺らぎを感じる。

外のあちこちから悲鳴が上がり始めた。

地響きのような音を立てて、何かが迫ってくる――。



六

何が起こっているのか、初めは見当も付かなかった。

大量の水に押し流されながら、信親はとっさに民家の垂木たるきを掴み、屋根の上へ逃れた。が、その民家ごと再び濁流に呑み込まれた。

暴れ川の名に恥じず、連日の雨で中富川が氾濫はんらんしたのである。

堤が決壊し、付近を洪水が襲っていた。

ずいぶん流されながら、信親がかろうじて濁流から逃れ出たのは、

あろうことか、敵の主城、勝瑞城の城壁だった。

兵糧攻めを選んだ長宗我部軍の本陣は、上流側にある勝瑞城大手門の正面に離れて敷かれ、信親隊も本陣近くに布陣していた。そのため信親はそのまま川に押し流されて、ぶつかった城壁に何とか取り付いたわけだ。

ようやく雨は収まってきたが、三好家の本拠である平城も、まるで茶色い湖に浮かぶように見える。

城壁のすぐ外を、濁流が音を立てて流れてゆく。

友よ 第7回

長宗我部の将兵はあちこちの建物や樹上へ逃れているが、信親の声の届く範囲には誰もいなかった。

信親隊の皆は無事であろうか……。

かすかに弦音が聞こえた。矢が一本、間近を飛び去ってゆく。

見ると、城から数人の弓手が信親を狙っていた。

少しでも、離れたほうがよい。

信親は石垣の上を慎重に移動した。

時おり放たれてくる矢に脅かされながら、ようやく南西の角までたどり着いた。城郭からは最も遠い距離だ。ここまで来れば、よほどの強弓でない限り、届かぬはずだ。

「天は三好に味方せり。今が好機ぞ！ 出陣じゃ！」

城郭から数隻の小舟が漕ぎ出してきた。舟べりに立つ小柄な将の白い眉毛が見えた。

手回しが良すぎる。宗伝はこの洪水を見越して、前もって漁師に舟を供出させていたわけか。

「僥倖きやうこうかな。あれに見ゆるは白銀びやくぎんに紅糸威べにいとおどしの具足！ 長宗我部の御曹司ぞ。今度こそ、捕えよ！」

舟に乗る弓手たちが矢を番つがえている。

逃げ場がない。信親は城壁の上に腹這いになった。

急ぎの出陣に備えて鎧を着けてはいても、信親は腰に脇差を差しているだけだった。襲ってきた時に、敵から得物を奪うしかあるまい。

友よ 第7回

「信親は相当の剛の者。散々に射掛けてから生け捕れ」

宗伝は戦い方を弁わきまえている。石垣にうつ伏せる信親の目の前に、音を立てて矢が刺さった。

このままでは負傷し、敵の手に落ちるのは時間の問題だ。

城壁の外は流れが激しすぎて危険だが、敵も追っては来まい。濁流の中へ逃げたところで助かるか知れぬが、鎧を外して身軽になれば、泳ぎの達者な信親なら、まだしも望みはあるうか。

城外の濁流へ目をやった時、城壁に近づいてくる一隻の小舟が見えた。懼もほとんど役に立たず、勢いよく流されて、あっという間に近づいてくる。今、城外にいるなら、敵ではないはずだ。

小舟の上に、濃鼠こいねずの小柄な姿があった。入江左門だ。忌み嫌う忍びの姿を見て、助かったと思う自分が情けなかった。

城壁まで押し流された小舟は、そのまま壁伝いに信親の方へ向かってくる。

この急流の中で舟を止めるのは至難だ。間近を通り過ぎる瞬間に、飛び降りるしかない。

城郭からも敵の小舟が近づいてきた。

信親は石垣の端から壁外へ、少しずつ体を落としてゆく。

入江の舟が滑るようになってきた。

十を数えるほどで、真下に来る。そう思った時――

体が宙へ離れてゆく。両手を引っ掛けていた岩が降雨で緩み、城壁

友よ 第7回

から外れたのだ。

仰向けのまま濁流の中へ、落ちてゆく。

流れに呑み込まれながら、必死でもがき、顔を水面の上に出した。

「早く、手を！」

信親は驚愕した。入江が喋っている。しかも、女の声だ。

入江が差し出す手を掴む。

もう一つの手で舟べりに手を掛けた。が、上がれない。

「あの楠くすのきの枝へ！」

胸が激しく高鳴った。よく知っている声だ。

片言隻句へんげんせつこでも、入江が誰なのかが、わかった。

絶望にも似た驚愕に襲われながら、呑み込まれそうな濁流の中で、

それでも愛おしさが込み上げてくる。



流されてゆく先に、大きな楠があった。

小舟が転覆するか、さらに下流へ押し流される前に、大木へ逃れて

おくほうが賢明だ。

——— 今だ！

信親は左手を舟縁ふねのへりにかけ、流れから顔を出したまま、右腕で枝を抱え込んだ。



七

長かった雨もついに止んで、夕暮れに晴れ間がのぞき始めていた。

友よ 第7回

水面近くに張り出した枝の上で、入江左門が楠の樹幹に小舟を繋ぎ止めている。

「また、そなたに命を助けられた」

信親は太枝に座り、幹にもたれながら、小柄な忍びに語りかけた。

「俺の勝手な思い込みであった。忍びには、女もいる」

綱を結び終えた後も、女はうつむき加減で背を向けたままだ。

「目の前の洪水より、俺にはそなたのほうが驚きだ」

自分を守り続けてきた女に向かい、信親は救いを求めるように問いかけた。

「俺は入江左門を嫌ってきたが、まだそなたに惚れている。るい、俺はどうすればいい？」

るいは頬かおりを取り去ると、観念した様子でゆっくりと振り向いた。

濁流のために薄汚れた小顔で、短髪には泥も付いているが、紛れもなく信親の初恋の女だった。結ばれはしなかったが、今でも心がときめくのは、恋心がわずかも衰えてはいないからだ。

「もうすぐ日が暮れます。このひどい洪水では、夜明けまで追っ手は出せませう」

自然の大きいなる力の前に、人など無力なものだ。敵も味方もしばらく動けまい。だが――

「その話ではない。そなたはずっと俺を守ってくれていた。こたびも

友よ 第7回

そうだ。改めて礼を言おう。詫びもしたい。だが、裏切られた気持ちもある。そなたは、俺が蛇蝎だかつのごとく嫌う残酷な忍びか、それとも、俺が初めて恋した猫の好きな女性にょしょうか。俺はどんな眼で、そなたを見ればよいのだ？」

あのるいが、残忍な入江左門だったとは……。

「今から考えれば、腑に落ちなんだ偶然も、全部辻褃が合ってくる。石清川の辺で出会ったのは、城外へ出た俺を藤目の残党から守るためだ。それ以前に川で見かけたのも、俺を見守っていたからだ。そなたに恋をしてしまった俺の前から姿を消したのは、父上の命だ。波川城にいたのは、父上の命でうなぎ殿を陥れるためか」

答えぬ女の忍びに、静かに確かめる。

「そなたは常に父上の命で動いていた。そうだな？」

るいは俯うつむいたまま、微かに頷いた。

信親は胸を搔むしき窺むられた。これほど胸が苦しいのはなぜだ。たとえ真実を知ってもなお、るいに恋焦がれる自分が後ろめたく、情けないからか。報われぬ片思いだからか。

「父上の命で、そなたは俺を守り続けていた」

「……少し、違います。わたしは途中から、お言いつけと関わりなく、若さまをお守りしたいと思うようになりました……」

それは、信親の想いを、るいが受け止めていたからか。

るいは腰の胴乱から瑠璃るりの首飾りを大切そうに取り出すと、自分

友よ 第7回

の首に着けた。ぎこちない仕草だった。

そうだ。心は通じ合っている。愛おしくて堪らなかった。

考えてみれば、信親は恋する女について、ほとんど何も知らなかった。知ってやれなかった。長宗我部のために、るいがどれほどの地獄を見てきたのか、知らぬでは済まされぬ身だ。もともと惚れていた初恋の女が、三度も命を救ってくれた恩人とわかったのだ。

「俺は、そなたのことを、もっと知りたい」

知れば、るいをますます好きになる予感がした。それでも、いい。

暮れ風が二人の濡れた体を冷やしている。

「るい、俺の枝へ上がって来てくれぬか。一人より、二人のほうが、温かい」

小さく頷いて、るいが枝の上で立ち上がった。信親の枝に片手を伸ばすと、足元の枝をトンと蹴り、別の枝に足をかけて、軽やかに信親の隣に座った。忍びだけに鮮やかだ。

夢にまで見た初恋の女性が、消えていなくなり、再び目の前にいる。恋心とは罪なものだ。今ごろになって、零のことを思い出した。だがもう、想いは止められなかった。信親はるいを抱き締めようと両手を伸ばした。が、慣れぬ体勢に均衡を崩す――。

「いかん！」

「若さま！」るいが止めようとする。が、間に合わない。

二人は濁流へ落下してゆく――。

友よ 第7回



八



るいは、信親の腕の中に抱かれています。

夜風が濡れた体を冷やしても、体を寄せ合っている部分だけは温かい。

信親と出会うまで、るいはほとんど心を持ち合わせていなかった。元親の意を受けた谷忠兵衛の指図で、忍びの仕事を黙々とこなすだけの女だった。だが、信親と出会ってから、るいは次第に変わり始めた。

入江左門こと、るいに向かい、信親は必死に訴えていた。

——殺さずとも、よいではないか！

藤目城落城の時、まだあどけなさの残る若武者の端正な顔は、純粋な怒りと悲しみで満ちていた。

土佐一国をあげ、手塩にかけて育てられてきた長宗我部の御曹司は、何と情弱たじやくなのか。かように甘い男が一国を保てるはずがない。

最初、るいは確信した。

長宗我部は次の代で滅ぶ。いい気味だと思った。

やがて信親は、忍びでなく、仮の姿にすぎぬ侍女るいを勝手に恋し始めた。正室にしようときえしていた。後に、実喰屋から届けられた瑠璃の首飾りを身に着け、たくさんの恋文を読み返しながら、るいは強い戸惑いを覚えた。

友よ 第7回

るいの心が大きく揺らいたのは、羽床攻めの後、るいが足輕を誤殺した時だった。あの時、信親は涙を流しながら、切々と説いた。

——今は、人どうしが殺し合ねばならぬ狂った世だ。だがこの男にも、父母がいた。兄弟姉妹が、妻や子がいたやも知れぬ。いや、身内を殺し尽くされて、天涯孤独であったやも知れぬ。

信親は遠く離れて立つるいに向かって、整った顔を突き出してきた。

——だがそれでも、友なら、いたはずだ。もしもいないなら、俺が友になってやれた。

血縁であっても平気で裏切られる乱世に、この御曹司は友情などをまだ信じている。

——身内は血の繋がりがうては作れぬ。だが、友ならいつでも、誰とでも、たとえ敵であっても、その気にさえなれば、作れる。数にも限りはない。何百人でも何千人でも、友とできよう。

この若者は、今までのいが出会ってきたどの人間とも、違う。

あれから、い、人を殺めることに困惑を覚え始めた。

今まで当たり前だったことが、出来なくなった。波川家に潜入して内情を探り、元親に一条内政の謀反を伝えた時も、これまでになく逡巡した。元親を暗殺して信親に継がせれば、皆を救えないかとまで思案したが、元親と忠兵衛は先手を打ち、瞬く間に政敵をしゆくせい肅清した。るいは、わが身の危険を感じながら、ただ信親を守ろうとした。信親の

友よ 第7回

ためなら死んでもいいと思うようになった。みずみず瑞々しい小川のごとく胸に溢れて尽きぬ、この切ない想いを「恋」と呼ぶのだと、二十代も半ばを過ぎてから、知った。

「るい、何を考えている？」

信親がそっと尋ねてきた。

腕の中にいるるいの頭を優しく撫でている。

大氾濫を起こし、勝瑞城とその周辺を水中に沈めている中富川も、今は小舟を少々手荒く揺らすだけの、もとの大河へと戻りつつあった。聞こえるのは、穏やかに変わった川の流れの音だけだ。

空はすっきり晴れ渡っていた。

月のない夜にあるのは星影だけで、あたりは闇に包まれている。今ここでなら、何を言っても構わない気がした。

「信親さまは、このわたしでも、人を好きになれると教えてくださいました。若さまを……お慕いしております」

信親が力強く抱き締めてくれた。

「俺も、そなたが恋しくてならぬ。もう入江左門をやめよ、るいはたして、その道はあるのだろうか。」

長宗我部家の闇を、るいは知りすぎていた。

元親は恐ろしいほど冷酷になれる男だ。忍びをやめたるい、を、元親は躊躇なく消すだろう。

「俺も、戦場では人を殺してきた。乱世のうちは、それもやむを得ま

友よ 第7回

い。だが、入江左門が人を殺める姿を二度と見たくはない。これ以上、そなたに危ない橋は渡らせぬ。父上には、俺から話をする」

いや、信親はるい、の出生も、おぞましき過去も、何もかも知らない。知らないほうが、いい。

ようやく想いを伝えられたのだ。それだけで、いい。

「るい、よいな？」

優しく語りかけてくる若者の唇を、唇で塞いだ。

るいは信親の肩上的高紐を外し、余計な武具を取り去ってゆく。

まだ水で濡れる女の帯に、男の手が掛かった――。



九

ふたりの姿を隠してくれた夜の闇も、朝の霧も、すっかりどこかへ消え行こうとしていた。

「おのれ、長宗我部の御曹司め！ どこに隠れておる？」

庄屋屋敷の屋根ごしに、敵兵の声が聞こえてきた。

さっきより、近い。

中富川の氾濫で勝瑞城一帯は水没し、戦地は一変した。おろん戦局も、だ。三好方は城内にあって皆、難を免れたが、土佐将兵は木の梢や民家、寺社などに逃れるだけで精一杯だった。

三好方は、不慮の事態に狂喜していた。

城から小舟を出してあちこちへ漕ぎ寄せては、行き場を失った長

友よ 第7回

宗我部兵を弓鉄砲で射殺いころし始めた。三好の将兵がへ鳥刺し舞と名付けた一方的で残酷な作戦の指揮をとるのは十河存保むねやすの懐刀、赤沢宗伝だった。

信親とるいは、狭い小舟の中で身を寄せ合っていた。搔卷かしまきの代わりに、切り取った楠の枝葉を幾つも重ね、体を覆っている。

「若さま、ひとまず大丈夫です」

るいは耳も鍛えていた。

敵の舟が離れてゆく音を確かめたらしい。

夜が明ける前に、ふたりは敵襲を警戒し、予め勝瑞城あらかじからできるだけ離れて身を隠そうと、舟を動かした。木や屋根の上では、すぐに見つかる。ふたりは大きめの庄屋屋敷を見つけると、主屋の陰に小舟を入れたのだった。

ふたりは身を起こして向かい合う。

昨夜初めて交わったせいにか、信親は気恥ずかしくなった。

「これから、何としたものかな」

天に青空が広がっていても、二、三日は水が引きそうになかった。河口近くでは海へ流されるから、長宗我部勢はできるだけ上流側へ逃れているはずだった。が、小舟にある二本の櫂かいでは船足が遅く、さして漕れまい。今、下手に動けば、敵に見つかる。

「御館さまは、必ず若さまを探しに来られます」

救出きしゅつを信じて待つ以外になさそうだった。元親なら、すでに探し始

友よ 第7回

めていよう。

「それまでに敵が来たら、いかにして戦ったものか」

敵は飛び道具だが、信親には脇差しかない。

「若さまも、お手伝いくださいませ」

るいは革の胴乱どうらんから小刀を出し、楠の枝を手に取ると、指ほどの太さの枝を折って、先を尖らせ始めた。箸ほどの長さの手投げ矢が出来あがる。器用な手つきに、弥次郎を思い出した。

「敵が回り込んできたら、わたしがこれで眼を狙います」

庄屋の屋根で、遠矢は防げるだろう。

「るいは頼もしいな」

飛び苦無くなの腕前は、初陣の時から知っている。生き延びるには心強いが、るいが歩んできた人生を思うと、やりきれなかった。手本通りに脇差で手投げ矢を作りながら、信親は尋ねてみた。

「るいは猿猴えんこうが本当にいると思うか？」

「見た人がたくさんいるのなら、きっといるのでしよう」

「猿猴は人語を解するという。話せれば、楽しいとは思わぬか」

想い人が器用にせっせと作っているのは、人の目を突き刺す小さな武器だった。

「信親さまとご一緒なら、楽しいやも知れませぬ」

ふたりで十本余り作ると、るいは胴乱に小刀をしまった。見とれるほど、横顔がきれいだ。

友よ 第7回

愛しく思っあらがて脇差を置き、抱き寄せる。るいは抗あわなかった。穏やかな波に揺れる小舟の上で、抱き合っている。

癖のある短髪を撫で続けていると、るいがそっと身を離れた。

「舟が近づいて来ます」

るいは音も立てずに立ち上がり、主屋の角からそっと顔を出して、城の方角を見ている。

「小舟が十二隻、弓鉄砲を持つ者が数十人います」

「俺は何をすればいい？」

歯がゆいことに、信親はほとんど戦力にならなかった。

「若さまは、わたしが言うように舟を動かしてください。うまく敵の船を乗っ取れば、弓鉄砲も手に入るはず」

そうなれば反撃できる。信親は弓も、鉄砲も得意だ。

「でも、もしわたしが戦えなくなったら、すぐに川の中へお逃げくださいませ。若さまは泳ぎがお上手ですから、助かるかも知れません。

舟の上よりは安全です」

ハッとなってるいを見た。死ぬつもりか。

「俺は、そなたを失いたくない」

信親の大好きな笑みを浮かべながら、るいが瞳を潤ませていた。

「お慕いする方と結ばれ、悔いはもう、ございません」

想い人をまた抱き寄せようとした時、人声が遠くで聞こえ始めた。

——気を付けよ。この主屋の裏に隠れておるやも知れんぞ。

友よ 第7回

るいがさっと表情を変え、手投げ矢を手に、囁いた。ささや

「若さま、綱を解いてくださいまし。舟をこのまま板壁浴いに下流へ流して、主屋のあちらの角へ」


信親は言われた通り、主屋の外柱などに掴まりながら、小舟を進めてゆく。放っておいても川はゆったりと流れているが、できるだけ音を立てないように気を払った。

「回り込んで、綱を柱へ結んでください」

死角にいて敵に見つからぬのが一番良いが、敵の目は多い。

——敵は飛び道具を持つとらん。鳥刺しにすればよいだけよ。

「次は向こうの角へ、ゆっくりと」

ふたりの舟は今、天から見た主屋の縦長の四角のうち、下にある短い辺の左角にいた。

声の近近さから判断すると、同じ短い辺の右角に、もうすぐ敵が姿を見せるはずだ。

るいが手投げ矢を構えた時、角に小舟の舳先へさきが見えた。

小舟が半分も姿を現さぬうち、敵兵はたちまち悲鳴を上げ、手で顔を覆った。るいが両手で次々と手投げ矢を命中させている。

るいはしゃがみ込んでから、跳躍した。

敵舟に乗り移り、四人の敵兵を次々と水へ落としてゆく。

「若さま、早く！」

急いで舟を漕ぎ寄せ、乗り移る。

友よ 第7回

置いてあった弓と矢を引っ搦むや、番えた。

すでに敵の舟が二隻近づいていた。

小舟に銃弾が当たり、矢が信親の脇腹を掠める。

信親が放った矢は、敵よりも一瞬早く弓兵の胸を貫いた。

るいも手投げ矢を命中させている。

信親の矢がまたひとり、敵兵を舟から射落とした。

船団の一番後方では、白眉毛の将が指図している。

「いったん、退けい！」 敵が舟を止め、引き返し始めた。

「主屋の陰へ戻りましょう」

ふたりで櫂を漕ぎ、建物の角へ戻した。

るいが綱を外柱に結び付けている。

奇襲で難を逃れはしたが、居場所を知った宗伝は遠巻きに、じわじわと攻撃してくるのではないか。弓鉄砲は手に入ったものの、矢弾は敵兵が身に付けていたため、数えるほどしか手に入らなかった。

信親は建物の角からわずかに身を出しながら、思い切り引き絞って矢を放つ。

五十間余り離れた舟の兵が、悲鳴を上げて川へ落ちていった。

「若さま、左！」

今度は先刻まで隠れていた左手の角に、敵の船が続々と姿を現し始めた。

矢を放つ。一人は倒れたが、何人もが鉄砲を構えている。

友よ 第7回

ふたりがとっさに身を伏せた瞬間、鉄砲の一斉射撃の音がした。るいは手投げ矢を握り締めながら顔だけ出したが、すぐに引っ込めた。

再び轟音が響く。何発も舟に命中した。

敵は近寄らず、遠距離攻撃に徹する気らしい。

「舟に穴を空けて沈めるつもりです。綱をたぐって、主屋に引き寄せてください」

水の流れは緩くても、綱の長さだけ舟は流されている。

信親が綱を掴んで引っ張る間も、銃声は止まない。小舟の腹に何発も弾が当たっていた。

ようやく建物の角まで舟を寄せ直すと、るいは身軽に主屋の屋根へ飛び移った。

「若さま」 差し出された白い手を掴み、信親も舟から跳躍する。

「上流側へ参りましょう」

屋根の傾斜に隠れながら、藁葺わらぶきの上を中腰で進む。水上よりも、信親たちのほうが自在に動ける。

北側の破風はぶかに並んで座った。

武器はるいの手投げ矢が残り数本だけだ。

「うまく火が点けば良いのですが」

るいは屋根から乾いた藁を抜き、胴乱から火打ち石を取り出すと、手早く着火した。

友よ 第7回

忍びが常備する狼の糞を混ぜると、黒い狼煙のろしが上がり始めた。

長宗我部軍も、銃声で河口付近での戦闘に気付いたろうが、味方にふたりの居場所を伝えたい。

態勢を整え直すためか、敵はしばらく攻撃を仕掛けてこなかった。

庄屋屋敷は泥の湖に浮かぶ小島のように、濁流のなかで孤立したままだ。

左手後方から声がした。屋根の上に敵兵が登ってくる。

右手前方に目をやると、城側の敵が戻ってきた。数十隻の小舟が向かってくる。

「援軍を引き連れてきたようだな」

宗伝が舟の舳先に立ち、弓を構えていた。

もはや、これまでか。

弦音が聞こえ、すぐ脇に矢が刺さった。まだかなり遠いが、矢嵐はこれからだ。

「せめて、あの名将を道連れとするか」

「いえ、一か八か、川の中へ逃れましょう」

周りは敵だらけだ。舟で追われ、まず助かるまい。十九歳で死ぬとは短い人生だと思った。

「若さま！ あれは味方の船のようです」

上流から大きめの漁船が、流れに乗ってまっしぐらに進んでくる。

「若殿、助けに参りましたぞ！」

友よ 第7回

異口同音に呼びかける声が聞こえてきた。

三蔵たちが舳先に立って両手を振っている。なるほど川漁師の船なら、川も自在に動けるわけだ。

三蔵の隣では、桑名太郎左衛門が自慢の弓兵たちと共に弓を引き絞っていた。



右手、城の方角からは、一直線に敵船団が迫ってくる。宗伝が次の矢を番つがえる様子が見えた。

「若さま、飛び込みましょう」

信親はるいと手を取り合った。

屋根を蹴って、勢いよく宙へ飛ぶ――。



中富川が真っ赤なのは、流血のせいではなく、茜空を映しているからだ。それでもこの後、信親たちの思惑通りに事が運ぶなら、やはり川面は血の色に染まるはずだった。

「百人ばかりで、本当にうまく参りまするかな」

ぶんと風音を立てて金碎棒を振り回す資吉に、信親は胸を張った。「多ければ、敵に気付かれよう。まさか川の中に敵が隠れておるとは思うまい。へ川の申し子たる俺ならではの奇策ではないか」

桑名たちの船に救出された信親とるいは、長宗我部の本陣に無事帰還した。三好方の鳥刺し舞にやられはしたが、多くの者は各所に逃

友よ 第7回

れて無事だった。

三日ほどですっかり水が引くと、元親は兵糧攻めを打ち切り、力攻めを命じた。

怒りに燃える土佐将兵は勝瑞城に猛攻を加え、十河存保はついに城明け渡しを申し出てきた。だが元親は、承服しなかった。

十日余りに及ぶ苛烈な総攻めの末、勝瑞城は本丸を残すだけとなった。

彦十郎は存保が自刃じじんせずに討って出、讃岐へ落ち延びると読んだ。逃げ道に伏兵を置くよう元親に献策すると、許された。

今や満足に戦える城内の兵はせいぜい数百だ。敵総大将を信親が討ち取れば、長宗我部御曹司の武名も上がると、元親は喜んだのである。もっとも、信親の提案を受け、彦十郎は当初の策を変更していた。川の中で、渡河中の敵を襲う。

川沿いを小さな影が駆けてくる。

「若さま、十河存保どのが討って出ました。北へ向かっております」
敵が三方へ同時に討討って出、うち一隊が包囲陣を突き破ったという。その隊に存保がいて、るいが見極めたのである。百名にも満たぬ数らしい。

「大儀であった、るい。対岸の彦十郎に知らせてくれ」
畏まったるいが去ると、信親は選りすぐりの信親衆に告げた。

「時刻も経路も、彦十郎の見立てた通りだ。手筈てはずは覚えておるな？

友よ 第7回

存保を必ず捕えよ。これで、阿讃の戦を終えるのだ」

皆が一斉に頷くと、信親は徒歩で川へ飛び込んだ。勢いよく水しぶきが上がる。

流れに乗って、下流へ向かう。

氾濫の水は引いても、中富川の水量は多い。鎧で体も沈むから、敵には見つかりにくい。敵も、夜の闇に紛れて逃げるつもりで、あえて夕暮れ時を選んだのだ。

渡河中の敵は、足元と流れに気を取られている。そこを上流から一気に流れに乗って、襲う。

信親隊は早い水流に身を委ねながら、進む。

やがて、下流に馬の嘶いなききが聞こえた。

川面から顔だけ出して、近づいてゆく。

足軽たちに守られて先を急ぐ、馬上の将が見えた。存保だ。

信親は川の中から、ざばりと姿を現した。

「今じゃ！ 総大将を捕えよ！」

夕闇に沈む川から突然現れた武者たちに、存保たちは慌てた。

信親隊が側面から突撃してゆく。

予期せぬ攻撃に、敵は大混乱に陥った。

「かかれ！ 鳥刺しの仕返しじゃあ！」

資吉が金砕棒で殴り込みをかける。

川は信親の庭だ。流れに乗って存保に急接近した。

友よ 第7回

「十河殿、覚悟！」 信親は槍を猛然と突き入れる。かろうじて存保が穂先で払った。

「おのれ、長宗我部の御曹司か」

存保は馬首をずらして進もうとした。

だが、川の深みにはまった。

「殿、先を急がれませ。こやつらはわしが相手をいたしまする」
急ぎ守りに入ったのは、赤沢宗伝である。

馬上の宗伝の長い眉毛が夕日で赤く見えた。宗伝の兵が必死で存保を守ろうと、信親の行く手に立ち塞がった。

矢音が聞こえると、突然、馬が棒立ちになり、存保が投げ出された。「わが腕前を見たか！ 存保を捕えて、大手柄を立てよ！」

得意の矢を存保の馬の首に命中させたのは、追撃してきた桑名太郎左衛門である。

川の中へ遁れた存保に信親隊が群がろうとする。

宗伝とその兵が懸命に立ち塞がった。

「皆の者、われらは運が良い。御曹司を人質にして逃げ延びるぞ。周りの兵も僅かじゃ」

「若をお守りせんか！」

資吉が一喝するや、長宗我部の将兵が信親を守る。

その間隙を縫かんぎって、川に隠れていた存保を三好勢が囲んだ。

「待たんか、存保！」

友よ 第7回

岸边から銅鑼^{どら}声^{こゑ}が聞こえた。後ろから猛追撃してきたのは黒具足の福留隊である。

突然、前方で銃撃が轟いた。

向こう岸には谷彦十郎の鉄砲隊が待ち構えている。るいの知らせで、退路を塞ぐべく動き始めたのだ。

「もはやこれまで。せめて華々しく散ろうぞ、宗伝」

「諦めるのはまだ、早うござる」

夕闇の迫る川の中で、信親は存保、宗伝主従に向かって声を投げた。

「もはや逃げ場はない。無益な血で川を染めぬために、降ってはくれぬか」

「皆、怯^{ひる}むな。これが最後の戦じゃ！」

宗伝が老いたかすれ声で叫ぶ。

「お主らは袋の鼠だ。これ以上、いかにして戦うというのだ？」

老将は下馬すると、足軽たちに馬を守らせた。

「若人よ、覚えておかれい。まだ戦いようはある。優れた将兵が戦う心さえ、失わねばの」

夜の近づく空へ、宗伝は抜き放った太刀を突き刺すように掲げた。

「殿とわしの馬を中心に、円陣を組め！」

しわがれた下知に、鍛え抜かれた生き残りの精兵が一斉に動いた。単純な陣形が作られてゆく。

「このまま、向こう岸へ渡るぞ！」

友よ 第7回

川の中を小さな嵐が動き始めた。あらゆる方角から長宗我部軍が攻め立てても、敵はしゃにむに、死に物狂いで前へ進む。

だがむろん、対岸へ近づくとつれて兵を失い、三好勢の作る嵐はどんどん小さくなってゆく。

その姿を、信親は尊いと思った。槍を降ろしたのはそのためだ。対岸から、彦十郎の鉄砲隊が火を噴いた。

兵が次々と倒れても、存保と一頭の馬を守りながら、円陣は岸边へ向かって突き進んでゆく。

「鉄砲隊に突撃せよ！」

宗伝の老いた声が響くと、三好勢が最後の関の声を上げ、凄まじい勢いで突入してゆく。

至近戦となって、さすがの彦十郎も押された。

一旦兵を引かせ、道の脇に展開し直す。

「今じゃ、殿！ 行かれい！」

「宗伝！」 存保の叫び声が聞こえてきた。急ぎ、馬に跨っている。「わしがここで追撃を止め申す。三好の再興をお頼み申しますぞ！」

中富川を渡り切った一隊はすでに、十数名にまで減っていた。

宗伝は向き直りざま、川に向かって矢を放った。

すぐさま老軀が川へ飛び込む。

宗伝の兵たちもならった。次々と水しぶきが上がる。壁になって、渡河中の追っ手を止める気だ。

友よ 第7回

「三好^{さんこう}の知恵袋、赤沢宗伝が白髪^{はくぱつ}っ首、欲しい者はおらんか！」

宗伝は素早く弓弦を引き絞って、次の矢を放つ。

押し寄せてくる長宗^{ながそう}我部^{われべ}兵を、宗伝の兵たちが迎え撃つ。

が、多勢に無勢、次々と討たれていった。

矢の尽きた宗伝は、死んだ家臣の骸^{むくろ}から槍を取ると、追撃して行く大軍に向かって、小さな体で仁王立ちした。

残る兵はもう、三名だけだ。

「寸刻^{すんこく}でよい、時を稼げ！ 馬を渡らせるな——」

宗伝の言い終わらぬうち、宵闇の迫る中富川に、数十発の銃声が轟いた。

小柄な老将は動きを止め、やがて頽れた。

そのまま、中富川の流れの中へ消えてゆく——。

「誰ぞ、馬を貸さんか！」

三 吼える資吉の肩に、信親は手を置いた。

「もうよい、資吉」

「存保は単騎でござる。馬なら、まだ討ち取れますぞ！」

「そうではない。われらはあの名将の死に、せめて敬意を払うべきだ」

命を捨てて主君を守り抜いた老将とその兵たちの凄絶な闘いに、

土佐兵はしばし沈黙していた。

弔意^{ちゆうい}を表すためだろう、夜を迎えた中富川の空に、彦十郎の鉄砲

隊が空砲を放つ音が聞こえた。

友よ 第7回

信親は川から上がると、戦いの終わった勝瑞城を見やった。敵城は今、天を焦がさんばかりに黒煙を上げ、乱世の闇夜で燃え上がっている。☰

友たちが信親の近くに並び、無言で壮大な炎を見やっていた。彦十郎とるいも戻ってきた。

「若殿、これを……」

三蔵のうち、十市と松崎が悄然とした顔で立ち尽くしていた。一人、足りない。十市が血の付いた手ぬぐいを差し出してきた。三蔵は川中の伏兵には加わらず、桑名隊に属していたが、宗伝の一隊が城を出撃した際に津野が戦死したという。肥えた若者が首筋の汗を何度もぬぐう姿を思い出した。

「丁重に弔い、土佐へ共に帰ろうぞ」

残った二人は男泣きに泣いていた。

「互いの友を失わせるのが、戦だ」

信親は薄汚れた手ぬぐいをぎゅっと握り締めた。



十一

雪化粧をした岡豊山の北麓、谷家の屋敷は、南麓と異なり人家も少なく、聞こえるのは彦十郎が低音で唱えている祝詞のりとだけだった。

「若さま、ようこそお越しくださいました」

お橋おきょうが人懐こい笑顔で、心地よく迎え入れてくれた。

友よ 第7回

この夏、出陣前に信親が慌ただしく^{みお}漣と^{しゅうげん}祝言を挙げると、彦十郎は出丸を出て谷家の屋敷へ戻り、土佐神社の巫女をしていたお橋を娶^{めと}って、所帯を持った。身の回りの世話をさせて学問の時間を増やすためだと言っていたが、彦十郎は少しばかり頬の肉付きも良くなつて、傍目^{はため}には幸せそうな様子である。

「お主に、折り入って頼みがあるのだ」

祝詞が終わるのを待って信親が部屋を訪ねた時には、彦十郎は早くも書物に囲まれていたが、眺めているのは讃岐の地図だった。

「戦の段取りを考えていたのか」

阿波を征した長宗我部軍は、落ち延びた存保を追って讃岐へ侵攻したが、元親は将兵の疲れを慮って、十二月に入り一旦帰国していた。春には四国統一戦を再開する。長宗我部としては、畿内の勢力図が定まる前に、四国を固めておきたいところだ。

「四国平定は見えました。後は畿内の動向次第。……して、何用得ござる？」

彦十郎が地図を背にして、くるりと向き直った。

「るいの、件だ」

中富川の伏兵戦の後、るいは忽然^{こっぜん}と姿を消した。元親に直談判をする前に、知恵袋^{はか}に諮^{はか}らうと考えたのである。

彦十郎は勝瑞城の戦いの際に入江左門の正体を知ったが、さして驚いていなかった。

友よ 第7回

「るいには、どこかで穏やかな暮らしをさせたい」

「当人は、忍びをやめると？」

「いや……」 やめるとは、はっきり言わなかった。なぜだ。

「おおよそ察しがつきまするな。御館様はこれまで、相当手を汚して来られたはず。最も優れたる忍びは、並々ならぬ役割を果たしておりましょう」

わかっている。だが、考えたくなかった。

「るいを今の境涯から救い出したいのだ。俺はどうすれば良い？ 策をくれ、彦十郎」

「弥次郎の末路をお忘れではござるまい。軽挙妄動けいきよもうどうは慎まれよ」

元親は信じがたいほど冷酷になる時があった。

滝や信親を思いやる心に偽りはないと分かるが、波川家に対する仕打ちには今でも戦慄し、憎しみさえ覚えた。あの冷酷さは一体どこから来るのだ。その元親の手足となってきたのが、入江左門こと、るいだった。

「放っておけば、るいが消されるやも知れぬ」

「この乱世を生き延びてきた忍び。簡単には死にますまい」

信親が動けば、かえってるい、を危地に晒しかねぬと、彦十郎は付け足した。

「るいは何かを隠している。あの不思議な女は何者なのだ？ 彦十

郎、調べてくれぬか」

友よ 第7回

「隠すのは、若に知られたくないからでござろう。知って、何となさるおつもりか」

「守りたいのだ」

必死に言くと、彦十郎は呆れたような顔をしたが、小さく頷いた。

「愚父にも探りを入れてみましょう。されど、まずは四国統一でござる。時を待たれよ」

「恩に着る」

「年明けには私も讃岐へ行って、諸々の膳立てをする所存。るい殿に会うかも知れませぬな」

「もし会えたら、るいに伝えてくれぬか。長宗我部を継ぐ者として、償いたいと」

「承知」彦十郎はにこりともせず、小さく頷いた。

「確か、今宵は出丸で騒ぐのでしたな？」

年賀の挨拶のために、諸将が三々五々、土佐へ戻ってくる。ふだんは遠地にいる従兄弟たちと信親衆で、宴席を設ける話になっていた。亡き友たちを偲ぶ会でもある。

「そうだ。一緒に行こうぞ」

「いや、日暮れ近くまで、まだ学問ができ申す」

彦十郎は軽く会釈すると、くるりと背を返して書見台しよけんたいに向かった。

(続く)